
《研究ノート》

ジョン・クレア「夕べの鐘」の文法性

笠原 順路

SYNOPSIS

This is an annotated explication of John Clare's "Evening Bells", with emphasis on lines that appear syntactically un-grammatical. These passages, on closer examination, demonstrates a highly sophisticated technique by which the poet creates a synesthetic world of his own, in which the sound of bells, whose resonance being felt on the skin as wind with the equivocal use of the number (*i.e.*, sometimes treated as singular, sometimes as plural), and intensified with the equivocal use of the verb (*i.e.*, used intransitively and later transitively), is perceived as inseparably united with the west wind. As a result the sound's audio-tactual reality in the poem acquires a mysterious depth of un-reality. (The similar technique is employed in "Flitting", as discussed by Wiener (34), where the noises of the "gentle floods" are / is consolidated into a single entity, and achieve / achieves unity with "Helpston", the omitted subject of the verb "warms".) Thus John Clare, far from being grammatically illiterate, succeeds in creating in "Evening Bells", a grammatically unified world of his own by intentionally being un-grammatical in the conventional sense of the term.

KEYWORDS

John Clare; "Evening Bells"; grammar; unity; synesthesia; audio-tactual (un-)reality



筆者がクレア (John Clare) の「夕べの鐘 ("Evening Bells")」を最初に読んだのは、わずか1年ほど前にすぎない。詩において、鐘や鈴の音の反響を描写する場合、鈴の音を表す動詞を自動詞と他動詞の両義に用いることにより、読者の頭のなかでは、ちょうど鐘や鈴の音が鳴り響くように、自動詞と他動詞の相反する syntactic momentum が意識され、読者は、意味を模倣した文法構造を意識することで、得も言われぬ快感を覚えるのだ (笠原 2016) —— という仮説に合致するような詩がないか、手あたり次第に "bell (s)" とか

“ring”などを調べていた時のことである。結論からさきに言えば、無論クレアのこの作品でも上記の仮説は成り立つ。しかしそれ以上に筆者が驚いたのは、一見、非文法的に見える語法が、実は極めて奥が深そうだという点である。以下、筆者がこの作品を文法に留意して読んだ跡をご紹介したい。寡聞にして、国内外を問わず、先行研究は皆無である。

Sweet the merry bells ring round On even zepfers dying swells The sweetest chord the harp can sound Sounds not so sweet as evening bells O merry chiming bells	5
Swinging falls & melting rise On viewless echo how it swells Tis but the music of the skies Can breath so sweet as evening bells O merry chiming bells	10
Faint & fainter how they fall Humming thro the lonly dells No sounds to charm this earthly ball Can charm so sweet as evening bells O merry chiming bells	15
Zepfers breathing once again Once again the zepfers swells Still I lye upon the plain Entrancd to hear the evening bells O merry chiming bells	20
While the runnel curdles clear Once again the zepher swells Sweeter still the strains appear O evening bells o evening bells How sweet is evening bells	25

第1聯冒頭のSweetは、直後に名詞がないことから、-lyのないflat adverbと解せよう。次のmerry bellsに定冠詞のtheがついているので、これが呼格ではないこと、つまり鐘に対する呼びかけでないことは明らかだ。次のringが、恐らく動詞だろうという見当はつく。それが直説法（＝「鳴る／鳴らす」）なのか、命令法（＝「鳴れ／鳴らせ」）なのかは、まだ決め手がないが、the merry bellsを、動詞ringの主語と解しておくのが、ここまで

では、最も妥当な解釈だろう。以上をまとめると、「甘美に、楽しい鐘が辺り一面に鳴り渡る」の意味が生じる。

2行目冒頭の前置詞 *on* はどこまでを支配するかが次の問題となる。つまり *zephers* までか、*swells* までかである。この問題と表裏一体をなしているのが、*zephers* の *-s* は所有格か複数形か、*dying* (←*die*) の意味上の主語はなにか、*swells* の品詞は何か、という諸々の問題である。もし、*on* が *zephers* までしか支配しないとすると、*dying* は *bells* を意味上の主語にとる分詞構文ということになるが、動詞 *swells* が、主語 *bells* の数と文法的に一致しないということが大きな問題となる。次に *on* が行末までを支配すると解すると、*zephers* の語尾 *-s* は所有格を表し、*swells* は名詞の複数形ということになるが、意味を考えると、風が *die* しながら *swell* するというのは、物理的に矛盾した現象で、にわかには理解が難しい。一方、*dying swells* が音を描写していると解するならば、主音自体が静まるものの、反響音が増幅するという現象として理解することが可能である。行頭の *on* の目的語がいずれであるにしても、意味上、文法上、問題のこの1行であることを確認して次に進む。

3行目で、明らかに2行目とは文法的に分断されている名詞句が出てきた。これをどう処理するか、取り敢えず1行目 *ring* の目的語ととることが可能であるので、(最前より述べてきた自動詞と他動詞の問題である)「ハープの奏でる最も甘美な音を、夕暮れ時の西風にのせて、鳴り渡らせている」と解釈して次の4行目まで行くと、3行目が1行目から続くと解するより、4行目の主部を構成していると解した方が自然である、つまり3・4行目の繋がりの方が強いことが分かる。ここで「ハープの奏でる最も甘美な音でさえ、夕暮れ時の鐘の音ほど甘美ではない」の意が優勢になる。3行目までの時点で一旦は他動詞と解した *ring* が再び自動詞になるのである。それによって、先の仮説が適用されて、鐘の音が文法的に反響するというのは、もう言うまでもない。読みの行為の時間軸にそって、自動詞と他動詞に揺れる動詞があり、この両方向に作用する *syntactic momentum* の働きによって、鐘の音が、まるで、西風にのって、または西風と一体となって反響しているのが、感じられるのだ。未解決なのは *swells* の *-s* が三人称単数現在を表すの *s* か、複数形の *s* かどうか、これは未解決のままにして次へ進む。

3・4行でまとまった意味単位を成しているとする、4行目冒頭の *sounds* だが、通例こういう場合は仮定法をとるのが一般的なのだが、ここでは直説法で、しかも助動詞もなしに表現されている点に注意しておきたい。

第2聯になり、第1聯です通りした問題に否応なしに直面せざるを得ない。1行目 *falls* と *rise* は *the evening bells* を意味上の主語にしているはずなのに、数が不一致で、2行目で *evening bells* とおぼしきものを *it* で受けている。つまり *evening bells* は単数にも複数にもなる変幻自在の存在だということが分かりかけてくる。意味の上では、*fall* と *rise* は、第1聯の *die* と *swell* に呼応するように思える。そう見てくると、遡って、第1聯2行目の *swells* についていた *-s* にも納得がいく。

第3聯、音がかすかになってゆくさまを表現しているが、ここでは1行目、前の聯では単数扱いしていた鐘の音を *they* で受けているようだが、もう我々は驚かないし、不思議にも思わない。

第4聯2行目が決定的だ。*swells* の主語は *zephers* 以外にない。鐘の音 *bells* のみなら

ず、西風 zepfers も単数として扱っている。さらに、2度 once again と強調しているが、ことによると、第1聯2行目の swells は zepfers の様態をもあらわしていたのかも知れない。

第5聯、2行目 swells の主語は、第4聯とは異なり、単数の the zepher になっている。最終行 evening bells を動詞 is で受けているのは明白である。

まとめると、西風と鐘の音を、時に単数で表現し、時に複数で表現し、また共通の動詞 (swell, breath[e]) を用いることで、両者が峻別し難い文法構造を成している。これによって、鐘の音と西風が混然一体となって知覚された状態が出現する。聴覚と触覚が融合した、共感覚的な統一世界である。クレアは、これを表現するのに、敢えて伝統的な文法に従わないという方法をとった。鐘の音と西風を共感覚的に知覚したクレアの世界に参入するには、文法を意識して読むことが必要不可欠なのだ。ゆめゆめ、前景化された非文法箇所を「訂正」してはならないのだ。

もしこれが、作者の意図なら、クレアの他の作品にも類例があるはずである。ヴァイナー (Stephanie Weiner) は『クレアの詩 (Clare's Lyric)』のなかで、1832年6月にクレアが故郷 ヘルプストン (Helpston) を去って、3マイル離れたノースバラ (Northborough) に転居した折に書かれた「転居 ("Flitting")」という詩で、故郷ヘルプストンのせせらぎの音 (noises) を単数概念で表現し、次の行で主語を省略することで、文法上の主語 noises とヘルプストンの村を重ね合わせている、と主張しているが (Weiner 34)、これも、「夕べの鐘」と同様の現実認識に基づく描写とみてよいだろう。

また、クレアにおける「法 (mood)」の問題にも触れておきたい。冒頭3聯3-4行目の表現である。これらの文は、眼前の現実を写實的に描いているというよりは、頭の中で考えられたことが表現されている文である。ここで注意しておきたいのは、通常なら仮定法で表現されて然るべき表現が直説法で、しかも助動詞すらなしで表現されている、ということだ。直説法を用いて、目の前の現実 (= 直説法の世界) のみならず、心の中の現実 = 非現実 (= 仮定法の世界) をも表現することで、つまり、眼前の現実が心的現実をも内包するといふ表現形式をとることで、眼前の現実そのものに精神的な奥行きが生まれる。これは決して高度な文法を使用できない粗野な農夫の英語なのではない。

「夕べの鐘」は、伝統的な文法を敢えて無視すること、または壊すことで、文法を前景化し、それによって眼前の現実には深い精神的な奥行きを見出し、それを共感覚的な統一体として認識しようとするクレアの意図が感じられる作品であった。今後、拙稿のような、そして前述のヴァイナーのような、クレアの非文法性の擁護の弁が続くことを期待したい。

本稿は、第89回日本英文学会全国大会における招待研究発表草稿「英詩を文法的に読む愉しみ」の一部に基づいている。

Works Cited

- Clare, John. *The Poems of John Clare*. Ed. T. J. Tibble. 2 vols. London: Dent, 1935.
 ---. *The Midsummer Cushion*. Ed. Anne Tibble and R. K. R. Thornton. Ashington: Mid Northumberland Arts Group, 1979.
 ---. *The Early Poems of John Clare, 1804-1822*. Ed. Eric Robinson and David Powell. 2 vols. Oxford:

- Clarendon, 1989.
- . *Poems of the Middle Period, 1822-1837*. Ed. Eric Robinson, David Powell, and P. M. S. Dawson. 5 vols. Oxford: Clarendon, 2003.
- Crucefix, Martyn. "Eluding the Awkward Squad: The Absence of Punctuation in John Clare's Sonnet 'Field Thoughts.'" *PN Review* 208, 392 (2012): 56-58.
- Weiner, Stephanie Kuduk. *Clare's Lyric: John Clare and Three Modern Poets*. Oxford UP, 2014.
- 笠原順路「Tennyson, Pierpont, Longfellow の詩における統語的に反響する鈴の音——付、Shelley と Gray の類例」『明星大学大学院教育学研究科年報』1 (2016): 27-35.